

元旦一人寒稽古

<< 作成日時 : 2013/01/01 16:05 >>

2013年1月1日



明けておめでとうございます

毎年元旦早朝に一人寒稽古を行ってきた。

今年は5時に目が覚めて起き上がる勇気がなければそれで良しと逃げ道を作っておいた。「塚山道場」で稽古に臨むためには、作務衣一枚でなければならない。

しかしそうした条件をあらかじめ設けることによって、怠惰の気持ちに打ち勝ち、目覚し時計の非情な音と共にすっと立ち上がることが出来たのである。

こういう序を記さなければならないほど、稽古に立ち向かう気持ちの鼓舞が必要なのである。

つまり、稽古場所に向かうためには「勇気」を求められる。これは当事者でなけれ

ば理解できないであろう。

元旦の五時、外はまだ真っ暗である。作務衣の上にダウンジャケットを引っかけ、チャリンコに飛び乗り、真剣の入った刀ケースを担いで「道場」に向かう。

塚山道場は小高い丘の上にあり、地表の下には縄文時代に生きた先人の墓ないし住居跡がある。この公園は縄文時代人の住居跡に作られたものなのである。したがって、私がその上に立ち剣を振るう行為を成すとき、丘の前で一礼して遠い先人に敬意を表し稽古にかかる。

明るくなるとジョギングや犬の散歩で付近を人が通るので、暗い内に真剣を遣う必要がある。霜の立った土を踏みしめ剣を振ると、ピューピューという凍った空気を切り裂く音がして、肉体をギュと引き締めるのである。

薄い作務衣一枚であるが寒さは全く感じない。刀を振るっているうちに目覚めたカラスがくぐもった低い声で鳴き、続けて甲高い逼迫した声を発する。おそらく仲間に警戒を呼び掛けているのであろう。

やがて正面の空が濃い桃色の線を掃き、夜明けを告げる。私の一人寒稽古が終了する合図である。

まだ家人が眠りこける家に帰って、時間通りに起きて稽古が出来たことを寿ぎ、着替えた後にビールを飲む。

至福のひとつ。

元旦のこの行事をいつまで続けることが出来るか、大きな楽しみとなっている。

佐伯領二写真展

<< 作成日時 : 2013/01/27 20:39 >>

2013 年 1 月 27 日



初老の「壮年」

去る 17～21 日まで、文京シビックセンターアートサロンで、写真家佐伯領二氏の写真展が開かれた。

彼は、私の妻が経営する「トーキョー・ポエット・カフェ」から 100 メートルばかりのところに住んでおり、毎日のように店に顔を出す常連中の常連なのである。

彼とは銀座の画廊で私が知り合った。話をしているうちに、住いが店にすぐ近くにあることを知り、名刺を渡しておいたのである。それから数日後店に顔を出した彼は、店のことを大変気に入ってくれ、店が暖簾を上げると同時に顔を見せるようになった。

小柄で少し背が曲がっているが、大変元気な初老の「壮年」で、毎週卓球クラブへ通い、山登りが好きでスキーにもよく出かけるとのこと。店に見えたときは、すでに今回の写真展を計画されていたようである。

店へ来ると、カウンターの角の決まった席に陣取り、お酒を飲みながら、何かの細密な設計図を覗いたり書き物をしたりしている。

芭蕉の句碑から示唆

そのうち、写真展開催の話が出てきて、その話題が主な会話の中心となった。彼が店に現れるのは五時そこそこなので、私は昼の仕事を終えて帰る前の一杯を頂いているところである。彼は専ら我がかみさん(ママ)との会話を楽しんでおり、私が出る幕はないのであるが、折に触れての会話の中で、自らが住む場所の目の前に展開する、地下鉄丸の内後樂園駅前の礪川(れきせん)公園の四季が主題であると語った。

この公園は、駅と中央大学理学部の建物の間に挟まれた比較的小さな公園であるが、その動植物の種類が豊富で、ビルに囲まれた街中の公園とは思われないほど豊かな自然が息づいていると彼はいう。とても豊かな四季の彩りであるとのことである。

写真を撮り続けるうちに、その場所がかつての水戸藩上屋敷の一部であることを知り、「礪川」(小石川とも読む)という命名がいつごろから使われ始めているのかということに興味を持ち、文京区の真砂図書館や都立中央図書館に通って調べているうちに、色々なことが分かってきたと、彼は目を輝かせて私たちに語る。

区史その他の公式文書でも、使用された時期が必ずしも明らかではなく曖昧なことに探求心を刺激され、調べているうちに、すでにかの松尾芭蕉が「一(ひと)しぐれ 礪(つぶて)やふりて 小石川」という句を残していることを(1677年)、近くの伝通院内部の句碑で確かめている。

貴重な埋没文書を発見

さらに調べを進めていくうちに偶然『礪川御殿大樹公成御記』（この時の大樹すなわち将軍は家慶〔いえよし〕公）という古文書を発見し、「礪川」（れきせん）の名を用いた御殿が水戸藩邸に存在していたことを突き止めた。幕末の水戸藩主景山公徳川斉昭の時代のことである。当時は「れきせん」とは言わず「こいしかわ」と呼んでいたはずとのこと。

御殿というからには、将軍を迎えるために特別造営された建物であったであろう。私もその写しを手にとってみたが、御成りの将軍が、何百人もの幕閣要人旗本集を引き連れて訪れたことが記されている（そのすべての名前が列挙）。その時の豪華な料理の内容も記され、なおかつ、水戸家から将軍家へ差し出された膨大な書画骨董などの目録が記されている。

この文書は都立中央図書館に埋蔵されていて、これまで世に出ることはなく、佐伯さんが見出したものといってよい。むろん控えの何通かは藩邸に残されていたのであろうが、度重なる地震水害火災等で存亡し、何かのきっかけで家臣その他に代々伝えられ、巡り巡って都立中央図書館が保管することになったものと思われる。

江戸の水戸上屋敷の歴史の一端を知る上で（あるいは御三家と将軍家の関係を知る上で）、貴重な資料であるはずである。



小石川の歴史に迫る

すでに述べたことであるが、この小石川辺りはほぼ毎年のように襲い来る天変地異あるいは火災のために、上屋敷の施設の多くが、倒壊流失焼失の憂き目に遭っている。その都度建て直し庭を整えるために、膨大な資金が必要とされる。佐伯さんはそのことにも興味を抱いており、徹底的に調べ上げて、詳細な小石川(礪川)史を作成する熱意に燃えている。

その手始めに造ったのが写真集『魅了春日礪川公園四季彩』(頒価 3,675 円)である。今回展示した作品のすべてが写真集に載っている。写真集の四季の彩りを述べる彼の詩的文章は味わいがあり、写真と同様彼が詩的感性の持ち主であることを明かして余りがある。

また、特に力を入れているのが礪川(こいしかわ)の地名の由来である。店の常連客としてばかりではなく、新たな課題に挑戦するアーティストとして彼と付き合っていかなければならない。写真展は終了したが、5 日間で(文京区長を始めとして)1,400 人を超える鑑賞者が訪れたとのことである。









詩即興朗唱とドラムの競演

<< 作成日時 : 2013/01/27 18:03 >>

2013 年 1 月 27 日

[illegible]

巻藁を積み込んで会場へ

荻窪のライブハウス『カフェ&ホール with 游』でライブを行ってからすでに二週間が経過した。

妻が経営する店の手伝いと飲酒に紛れてのびのびになってしまったのである。

それでもなおかつ、即興朗唱の内容を忘れないように日々記憶を蘇らせ続ける努力をした。そうするくらいなら早速記述にかかれればよいのであるが、すぐできないところが私の弱さであり怠慢である。

16 時開演なので、巻藁を運んでくれるわが文武両道塾生の木下氏と正午に日野の本部道場で待ち合せ、水に漬けていた 7 本ばかりの巻藁を彼の車に積み込み萩窪へ向かう。

日野から荻窪の会場まで一時間半を要した。競演相手のドラム奏者中村達也さんはすでに到着していて、セットを運び入れている最中であつた。着いて間もなく他の二人の塾生高梨、後藤の二名が到着。会場は全体で20畳を少し超えたくらいのスペースしかなく、ステージ側には、グランドピアノとPAセットが置かれていて、その一隅をドラムセットが占めることになる。

狭小な空間での演武の工夫

我々が演武する空間は四畳半ほどしかない。朗唱と演奏だけならステージのすぐ前まで客席を設定できるが、真剣を使用するので椅子を少し遠ざけなければならない。

その狭小な空間で、木刀を持っての二人の組太刀、真剣での藁の試斬がいかにしで可能か知恵を絞る。何とか目途をつけ、達也さんと司会の伊藤さんを交えて進行の打ち合わせを済ませ開演時間を待つが、案内状を送付した人たちの姿がほとんど見えない。結局開演時間をずらして待ちに待ったが、私の側からは数名の入場を数えるのみ。主催者側を落胆させることになってしまった。

客の入りが多いときは気を良くして張り切るのは当たり前であるが、少ないときはそれなりに目一杯の力を出そうとするものである。

第一部は刀術演武、第二部は冒頭で達也さんのドラムソロ、次いで私の即興朗唱とドラムの競演という設定である。

第一部の冒頭で、日本刀とはどういうものなか、何故現代人の我々が人を斬る技を習得しようとするのか、といったことを数分話して演武に入る。





実戦刀法を演じる

冒頭は基本中の基本である十本組太刀を木下、高梨の二人の塾生が演じる。

組太刀には寸止めという技が用いられる。相手の太刀を躲して打ち込んだ木剣が、頭部に当たるか当たらないかすれすれのところで止めるのである。また、相手に切り込んだ袈裟の太刀が身体すれすれのところで通り過ぎるいわゆる「間合い」を見極めることが組太刀では重要である。

これが出来るようになるためには熟練を要するが、それが出来るようになると見ている人たちにとっては、実戦さながらの迫力を有つ。まだ修行途上にある塾生にとって今一步の感があるが、手順を間違うこともなく立派にやってのけた。

続いて巻藁を中央に一本立てての試斬。三人が交互に切って落とす。それも失敗なく終了。続いて、二人が相対しての斬り合いでどのようにして勝を収めるか、という実戦刀法を私と後藤君で演じて見せる。

まず、日ごろ敵対している者同士が路上ですれ違った時(両刀を帯びた武士は、路上で、帯刀した左側ですれ違うことはない。万一鞘当等で斬り合いになることを避けるためである)、お互いに殺気を感じて抜き打ちで斬りつけようとする。振り向いて斬り合うわけであるから、一瞬早く振り向いて刀を抜いた方が勝を収める。

私は振り向きざま斬り上げで相手の背中を狙う。相手はそうはさせじと振り向きざまの水平抜き打ちで反撃してくる。ほんの0、何秒かの差で相手は背中を浅く斬られる。それにひるまずさらに斬りかかって来ようとするところを、左裏入り身で躲して半回転し、左から右の水平で相手の胴を薙ぎ即死させる、というものである。

そういう説明をした後巻藁で藁を試斬する。この後引き続き後藤君を相方に側面からあるいは後方から斬りかかってくる相手に対処する型を二本演じて見せ第一部終了。





ドラムの迫真の演奏

暫時の休憩の後、いよいよ達也さんのドラムソロが始まる。彼は現在我が国のジャズドラマーとしては5指に入る達人である。私とは長年の付き合いがあり、こうした小さな空間で競演を快諾してくれる仲なのである。

私が30年の付き合いで見たことがないような、技術の粋を尽くした激しいドラムが展開され、感嘆と賞賛の拍手掛け声が鳴り止まなかった。彼はもう70歳に手の届く年齢であるが、年を追うごとにドラミングは激しさとテクニックを増すばかりである。

私は彼の演奏中客席の中にいて、砂漠で喉が渴ききった旅人のように、ビールと日本酒を交互に飲み続けた。ほぼ泥酔に近い状態にならなければ新鮮な言葉が喉から飛び出してこないからである。達也さんの迫真の演奏が、さらに酒を飲むピッチを早める。司会者はもとよりスタッフも含め全員が達也さんのドラムに酔い満ち足りた。

殺気と富士山とモチ

続いて詩即興朗唱の登場。

第一部の終了時、第二部で行う即興詩のテーマを、観客全員に考えてもらっておくよう司会者に頼んでおいた。出された言葉をキーワードにして即興で詩を謳うのである。

司会者の問いかけに、殺気、富士山、モチといった言葉が飛び掛かってきた。他にも二つほど言葉があったが、いまや思い出すことが出来ない。

「殺気」という言葉が引っ掛かり、テーマが浮かんできた。達也さんに合図して音を先行してもらおう。ステックの先にぼんぼりのついたマレットというステックでバスドラムを叩く優しい音が響いてくる。私はこのマレットのドラム音が大好きなのだ。大一声を発する。

「先の見えないこの断ち割れた世の中に、深い狂気が内向している。

どこを見渡しても一寸先は闇の中、
どこに世界が向かっているか方向性が見えているわけではない。

ましてや私自身の内部も真っ二つに裂けていて、
右目は正義と信念と創造に向かってめらめらと燃え、
ひたと暗闇を見詰めているのに、
左目は、怠惰と邪心、昏い欲望と裏切りへの意思を秘め、
半眼のままどこをも見ていない。

私は生きているのだろうか死んでいるのだろうか？

立ちすくむ私の足をふっと持ち上げるものがある。

霧のようなエプトプラズムのような、
ふわりとした白い何かが私の身体を持ち上げ、

一気に天空へ押し上げてゆく。

いまや私は焼いて膨らんだモチのような雲の上を歩いている。

私は死んで天国へ行ってしまったのだろうか、それとも夢を見ているのだろうか？

たなびく雲の遥か彼方にふいに白い雲をいただいた富士山が現れる。

私の希望、私の存在の根拠、私の目標！

富士山に向かって雲の上を歩く私の背後に強い殺気を感じる。

私は死んでいるわけでも夢を見ているわけでもない。

その殺気こそが私の現実であり左目の正体なのだ。

殺気を十分に意識しながら、一歩また一歩と富士山に向かって歩を進めてゆく。」

といった内容である。



不覚の帰宅

むろん、正確に再現しているわけではない。私は決してライブの即興詩を録音しない。なぜなら、ライブの熱気と観客との魂の交換は録音された対象には決して記録されることはないからだ。

音の場合には別かもしれないが、言葉はその熱気の中でのみ会場の一体感を醸し出す。こうして再録して見ても、観客との音との一体感は消え失せたままである。

とはいえ、ライブの高揚感是十分に味わうことができた。

終了後、出演した四人共々刀の手入れを済ませ、主催者が経営するカラオケスナックに繰り出す。荻窪から私が住む高井戸のアパートまでタクシーで一区間と少しだ。そういう気の緩みがあり甘えがあって、みんなが心配するほど酔ってしまった。

不覚というべきである。とりあえず自宅には帰り着いたのであるが、見ると見も知らぬ男性にサポートされて自宅の玄関まで送られてきたのであった。左目の殺気に要注意！

書聖・王羲之展と円空展

作成日時 : 2013/02/11 18:58

2013年2月11日



中国の書と日本の彫刻

昨日の日曜日、久しぶりに上野の国立博物館に出向いた。

私が所属する「ジパング文化普及会」の会長である山後墨仙氏が提唱して、会

員たちが上野に集ったのである。

ちなみに墨仙先生は、自ら書フォーマーと名乗る書道家である。8名ほどの会員が集まった。

私がか会社勤めをしている頃、春の上野には毎年顔を出したが（花見）、芸術鑑賞で博物館を訪れたのは久しぶりである。

国立博物館の平成館では、同時に円空展も開催しており、それも鑑賞するというのが集いの主旨なのである。墨仙先生は円空の愛好家でもあり、自身で数点の円空仏を所有しておられる。

書の帝王「書聖」

王羲之という書家は今から 1700 年程前の中国東晋時代の書家であり、書を芸術に高めたと言われ、「書聖」と称されている。

「聖」と名が付くのは、その道の最高位と考えて間違いない。我が国では戦国時代の剣客上泉伊勢守が「剣聖」と呼ばれ、中国では李白が「詩聖」と呼ばれるがごときである。

したがって王羲之という名はほとんどの人が聞いたことがあるはずである。それほどに有名な歴史的人物である。

ところが、この人の真筆は只の一つも残されていないというのであるから驚きである。それなのに何故かくも有名な歴史上の人物となったのか……？

その流麗で気迫に満ちた筆致が元であることは言うまでもないが、真筆が残されていないというそのことが、伝説となり「書聖」という神格化に繋がったことは疑いえない。もちろん、彼の書簡や公開の書は生存当時から評価が高かったのであり、死

後徐々に評価が高まっていったというわけのものではない。

王羲之の代表作「蘭亭叙」コピー（山後氏蔵）



中国本土からもツアーで来日

歴代の中国皇帝がその書を秘蔵し、唐の時代(9世紀)の太宗皇帝は、収集した数千点の王羲之の真筆書を自身の墓陵に埋伏させたと伝えられている。

戦乱その他で失われたこともあって、王羲之の真筆が現存しないという結果になってしまった。

ただし模刻は精緻を極め、真筆と区別がつかないほどであるという。模刻の技術もまたそれ自体が芸術であると言える。

とにかく、書に品格というものがあり、流麗雄渾にして乱れることがない。全文漢文であるので私のような素人には容易に読み下しは出来ないが、書が品性を告げているということは一目で分かる。まるで形を崩した写経のように筆致に乱れが見えない。

王羲之は楷書だけではなく行書草書にも卓越した技量を有していた。彼は役人であったが 50 歳をを待たずして職を辞し、悠々自適の生涯を送ったといわれる。

この展覧会は何十年に一度といわれるほどの大規模なもので、中国本国からもツワーを組んで鑑賞に訪れている、と墨仙先生は我々に解説していた。

久しぶりに稀有なるものを観た、という感慨が妥当であると思う。声を賭けてくれた墨仙先生に謝謝といったところである。

円 空 展



生涯 12 万体の仏像

円空は独特の仏像彫刻師として知られる。

彫刻といっても、鎌倉時代の運慶快慶といった本格的な仏師ではない。仕事ないし職業として仏像を彫るのではなく、修行の一環として生木を断ち割って仏を彫った。

円空仏についてはいまさら詳しく解説する必要はないであろう。ただ実際に観て驚いたのは、思っていたより大作が多いということであった。写真などのイメージでは、30, 40 センチ程度の作品がほとんどであろうと考えていたが、何と2メートルに及ぶ大作が展示されていて度胆を抜かれた。

円空は、江戸時代寛永年間から元禄時代に(1632－1695)かけて生きた山岳修

験者であり、生涯に掘った仏像は 12 万体に上るとされている。

現存するのは 5000 体余であるが、60 余年の生涯を考えると、毎日休まず数体から数十体の仏像を制作しなければ 12 万本に達することはできない。



微笑みを絶やさない彫刻

彼にとって仏像制作は修行の手段であつたにちがいない。経典を読むのと同じ意味で仏像を彫った。彼の仏像にとって特徴的なのは、背面は木材を断ち割ったままの状態、一切彫刻を施していないということである。いわゆる仏師として彫刻しているわけではないことがその姿で分かる。

表面が仏の姿を留めていればそれで良いのである。

しかし、ステロタイプではない。顔に独特の表情があり、たいていはほほえんでいるか笑っている。顔の目と口は一刀で筋を付けられただけであるのに、実に豊かな表情を有している。

これは企まれたものではないといわざるを得ない。一刀で表情を与える鑿がそのような形に動くのである。

円空の全人格が一瞬にして表情を創り出すのである。この世の全てを受け入れるようなあの微笑みの表情に、円空の全人格が現れている。

鑿後に懺悔と祈念の跡

ただし、ただひたすらに優しく穏やかなだけではない。彼は仁王を彫っても恐ろしい表情とは無縁であるが、彫り跡に荒々しさと、何かを断ち切るがごとき意志の強さがほの見える。彼の本質が仏道修験者であつたことを忘れてはなるまい。

円空は修行の為というより何かを断ち切るために絶え間ない仏像制作に励んだのではないだろうか？

これは単なる憶測に過ぎないが、もしかしたら若き日に人を殺めて、その懺悔の意味を含めて仏像を彫り続けたのでないか、と思ったりするのである。

邪推といわれても仕方がないが、彼の間断ない仏像制作に、祈念と懺悔の思いが込められているように思われてならないのである。

それは一詩人の想像力として思い留めることが無難である。円空が後世の我々に突き付ける問題は、必死を祈願するというその一言である

『今、日本に求められる「武士道」』

<< 作成日時 : 2013/03/03 19:14 >>

2013 年 3 月 3 日



二回目の「武士道」講演

去年の11月、東村山市に本拠を置く創美流華道会館で『文武両道と武士道』という講演を行ったばかりであるが、縁あって神田に本部のある一般社団法人日本イベントプロデュース協会で又しても武士道の講演をすることになった。

この協会はJEPCの略称で知られる全国規模の団体で、幕張とかで大規模なブースを設定して、主に企業の内容紹介・イベントを取り仕切っている。その他にも息抜きのイベントとして、各界で活躍する様々な人を招いて私の今回のような場をほぼ月に一回程度設定している。私がこの協会で講演・演武するのは実は二回目なのである。

さて講演の内容であるが、この現代日本で武士道に関心が集まること自体異様な状況といってもよいが、考えてみれば、TVでも映画でも時代劇が衰えることなく放映されているわけであり、本当は異様でも何でもないのである。最近

の新聞の調査で、現代の日本で小説を読む人たちの約半数は時代小説であることが分かった。

11月に聴きに来てくれた人が何人か今回も聴きに来て下さることは分かっているのですが、同じ原稿での講演はできない。タイトルが「武士道」であるので、内容にダブる部分があることは止むを得ないが、「武士道」にさらに別の面から光を当て、深化させることを心がけて原稿を書いた。

パソコンワープロA4紙で10ページあるから400字原稿用紙で30枚強といったところであろう。今回は若い弟子を一人相方を選んで連れてきている。真剣と木刀を用意して席の前のテーブルに並べ置いてある。内容を全文紹介したいところであるが、粗筋を述べることで勘弁していただく。

金打(きんちょう)と敵討ち

かの有名な『武士道』の著者新渡戸稲造は、明治の代に替わることによって武士道は滅びた、と述べているが、忠孝を中心とした封建時代の「武士道」が滅びたのであって、武士道精神まで滅びたわけではないことを強調して前提とした。であるからには、武士道というものがどういうものであったかをおさらいしておかなければならない。

その初めに、武士の誓いの儀式であった金打というものについて解説する。

腰にさした大刀を少し抜いてまたちゃりんと鞘に納めることをいう。簡単ではあるが、「武士に二言はない」という固い誓いの儀式である。

次に敵討ち(仇討ち)ということがある。これは士道の中心となる武士の義務であり、避けることは出来ない。敵討ちが出来ない武士は武士に在らざる者として、放逐されるか逐電するしかない。

敵討ちを藩庁に届け出れば仇を求める旅費が藩から支給される。しかし、ど

こへ逃げたかわからない仇を求めての流浪は一生をかけた過酷な仕事である。その過程で様々なドラマが生まれる。それゆえ小説の格好のテーマの一つとなっている。

また戦場での死に方も、跡継ぎに家禄の存続が許されるかどうかの判断材料になった。

切腹して果てた武人たち

切腹および切腹の作法は「敵討ち」に劣らず武士の必須の条件であり、作法と士道にのっとって見事に腹を搔っ捌いた武士は賞賛されお家の名誉となった。とりわけ、正式な作法である十文字腹を搔き切って果てた幕末土佐勤王党の武市半平太は武士の鑑とされた。

また、明治になる直前の慶応四年に泉州堺事件と呼ばれる出来事が発生した。堺の港を守っていた土佐藩兵が、狼藉を働いたフランス水兵を 11 人殺傷したとして、20 名の土佐藩士が切腹を命じられた。

フランス人たちが見守る中で藩士たちは次々に平然と腹を斬り、中には半平太と同じく十文字腹を斬って露出した腸を掴み取り、フランス人の席に投げつけた豪の者もいたという。辟易したフランス人たちは、途中で切腹を止めさせ退席したとのことである。

明治天皇の崩御の際殉死した乃木大将、太平洋戦争終戦間際に割腹自殺した陸軍大臣阿南(あなみ)大将は介錯を拒み、腹部よりの出血によってともに数時間後に死亡している。

乃木大将は明治維新時代の人であるが、阿南大将は昭和の軍人である。彼は自らを武人と任じ、敗戦を恥辱として武士道の作法に殉じた。

「止め」の作法と生麦事件

続いて武士同士の戦いの作法とされる「止め」ということに言及した。

「武士の情け」と呼ばれ、戦いの相手が斬られるか撃たれるかして最早助からないと見極められると、相手の頸動脈や心臓などを刺し貫いて絶命させる作法のことである。

どのようにするのかを見てもらうために、相方として来てもらっていた弟子の後藤君を床に寝させ、刀を首に擬してその動作を示した。刃のない模擬刀を用いたが、ちょっと力が入って首を突いてしまい、後藤君がびくりと首をもたげたので、客席は笑いの渦となった。



武士の間では「止め」が作法たりえても、外国人にはとても理解できない野蛮

行為と写る。

幕末神奈川の生麦村で起こった「生麦事件」がその顕著な例である。薩摩藩主代理島津久光が軍勢を率いて帰藩途上、生麦村を通りかかった時に、騎馬を楽しんでいたイギリス公使館員4人が、避けることが出来ないままに行列に割り込んでしまい、憤激した藩士によって一名が殺害された。名前をリチャードソンという。

肩口から脇腹に掛けて斬り下げられ 100 メートルほど騎乗したまま逃げたが、腸をはみ出させて落馬した。そこに駆けつけた藩士が、最早助からないとみて「武士の情け」である止めを刺した。

止めの正式の作法は、首を皮一枚残して切り離すということであるらしい。腸を露出させたとはいえ、まだ生きている人間の首を切り離すというのは二重の殺人である、と激怒したイギリス側は薩摩藩に犯人引き渡しと賠償金 30 万両を要求してきた、というのが事件の内容である。

薩摩藩は、犯人は逃亡したとして引き渡しにも賠償金の請求にも応じなかった。犯人引き渡しには最後まで応じず、莫大な賠償金は英国の武力を怖れた幕府が支払ったのである。この事件は、後の薩英戦争の端緒を作った。

仁義礼智信勇の復活

以上述べた幾つかの事例は、封建時代武士道の顕著な例であり、現代に生かす直接的な参考とはならないかもしれない。それどころか、現代の日本は、親に孝を尽くし子を慈しみ礼節を重んじる、古来よりの伝統的精神が欠落しているように思われてならない。子殺し親殺しは日常茶飯である。

しかし、その精神が死に絶えたわけではない。家庭を犠牲にしてまで会社に

尽くすサラリーマン、命の危険を顧みず線路に落ちた人を救おうとして電車に轢かれたカメラマン、大震災直後の混乱期に、略奪も争いもなく整然とスーパーの前に行列を作った現地の人々等、武士道精神を思わせる事例はまだまだ枚挙に暇がない。

もう一度、古代中国の孔子・孟子によって提唱され日本人の道德規範となった、仁義礼智信勇を復活させる必要がある。古武道習得はその大きな力になると信じている。伝統文化を大切に先祖たちの生きざまを追体験することは、これからの日本にとって最重要の課題である。

以上が、講演の大意である。

講演終了後、解説付きで後藤君に刀術の型を幾つか演じてもらった。せっかく真剣を持ってきているのだからということで、ビールの空き缶に乗せたグレープフルーツを抜き打ちで斬って見せることにした。フルーツが落ちた後の空缶をすかさず後藤君が両断するというアイデアである。

あの大きな果物が、やっと三回目の抜き打ちで上端を少し斬った。後藤君も缶の上蓋に斬り付けてしまい、両断といかなかったのは残念であった。これまでほとんど失敗したことが無かっただけにショックであったが、ご愛嬌というものである。

会場に酒と料理が運び込まれて打ち上げの宴会。かくして夜は更けて行き、神田の町に繰り出して二次会の氣勢を上げる。



2013 年 3 月 9 日



うかうかしているとアッという間に日は過ぎ去る。第二十四帖「胡蝶の巻」の語り会があって、二週間が過ぎてしまった。感銘と記憶が失われるということはない。気になっている分だけますます鮮明に語りのシーンが蘇ってくるというものである。

時間になって出入り口の扉が開き、和服姿の彼女がしとやかにまた優雅にステージに上がって行く様は、「紫の上」もかくやと思わせるものがある。

上手側にはこの巻の人間関係を表す全紙が掲げられ、そこに胡蝶と鳥の姿に扮した着飾った童女の絵が写されている。その絵の意味は語りが進むに従って分かってくる。

の上と西の対秋の御殿に住まう秋好中宮の季節を巡る対決、もう一つは南の対に住む玉鬘の姫君と源氏の確執が描かれる。

春爛漫の紫の上の御殿では、隣の御殿に里帰りをしてきた、今上帝（冷泉天皇）の中宮である秋好中宮の歌へのご返歌の宴を用意していた。むろんすべては源氏が用意し企画したものである。

中宮は、紫の上に

「心から春まつ園はわが宿の紅葉を風のつてにだに見よ」

（「そちらの庭では今の季節何もないでしょうから、こちらの庭の紅葉をせめて風の便りにでもご覧あそばせ」一語り手訳）

と紫の上へ送ったのであった。

源氏の嫡男夕霧の中将を使者に仕立てた紫の上の返歌は

「花園の胡蝶をさへや下草に秋まつ虫はうとく見るらむ」

（「花園に舞う胡蝶までも、秋をお待ちになるあなたはつまらないとご覧になることでしょうね」一語り手訳）

というものである。

お互いが自らが住む御殿の庭を自慢しあっているわけであるが、遊びとはいえ、女同士の自慢比べ、意地の張り合いであることは明らかである。

歌舞音曲に明け暮れる貴族

春の御殿と秋の御殿は広大な池を通して繋がりが合っている。春の御殿の釣殿で盛大に催される歌舞音曲の様子は秋の御殿にも伝わってくる。

中宮という立場にある秋好中宮は気軽に隣の御殿に訪ねて行けないのである。それで、源氏はあらかじめ建造していた龍頭鷁首(りゅうとうげきしゅ)の唐船に唐風に着飾った女童(めのわらべ)を乗せ、紫の上と招いた中宮の女房たちを喜ばせるのであった。

中宮自身は、隣の館で盛大な宴会の様をただ窺うだけなのである。何と味気ない無粋な立場であろうか。 むろん囚われ人ではない彼女は、帝が催す源氏に勝るとも劣らない盛大な歌舞音曲の場に居合わせる機会は少なくないであろうが、中宮としては、六条院の女主ともいべき紫の上の御殿に招かれて威勢を示すことが出来ないのは、残念でもあり悔しくさもひとしおであるに違いない。

身分の違いを超えて女は張り合うことで生き甲斐を感じる、とふと思わせる場面である。

太政大臣という暇な身分である源氏は連日こうした遊びに明け暮れている。西洋の王侯貴族も似たような暮らしをしていたに違いないが、貴族という種族がその精神を蝕み衰えさせてゆく様が透かし見えてくるのである。 『源氏物語』という王朝絵巻をひもとくとき、こうした感慨は興を殺ぐものであろうが、やがては「もののあわれ」に通底することを考えると、あながち的を外れた感慨ではないのかもしれない。

ピエロすれすれの光源氏

さて、源氏は六条院に迎え入れた玉鬘のことが気になって仕方がない。ことあるごとに通っては何かと世話を焼いている。

玉鬘の美貌を伝え聞いた貴族の子弟が恋文をせっせと届けることに源氏は気を良くしている。源氏の娘と信じて疑わない彼女の実弟までが恋の手紙を送り続ける始末である。源氏は彼女を手中にしていることが自慢でならないのである。彼女に恋文指南までして悦に入っている。

ところが、うかうかしていると彼女の気持ち揺らいで誰かになびかないとも限らない。本当は己が彼女に恋しているのである。

そうした邪心を内に秘めたまま、正妻ともいうべき紫の上に彼女の事をちらりと話したところ、「あなたに頼り切っている彼女が気の毒だ」と紫はいう。源氏が気色張ると、「あなたにはこれまで幾度も悲しい思いをさせられてきた」と彼女は本心を吐露する。

助平心を見事に読み取られた源氏は反省し狼狽えるのではなく、むしろ逆に玉鬘に心の丈を打ち明け、衣服を脱いで添い寝までするのである。ただ、強引に一線を踏み越えることまではしないで、自分につれない玉鬘に散々恨み言を述べ立てる。

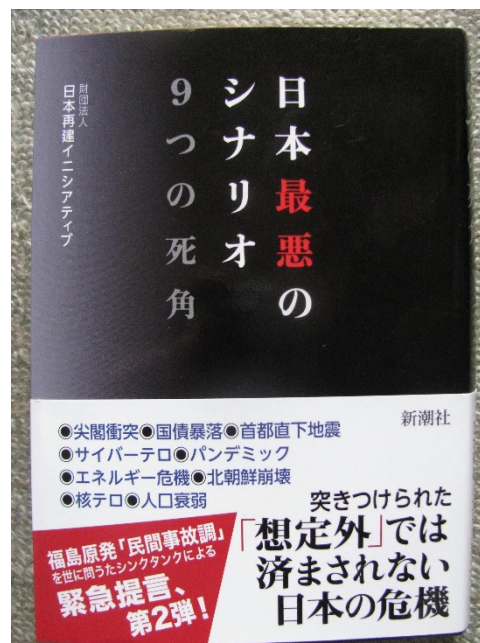
「自分を実の父だと思いなさい」とまで言いながら言い寄ってくる源氏に対して、姫君は恐怖を感じたに違いない。震え戦き身を頑なにするのが精いっぱい彼女である。

根っから好色な源氏は、自分の立場を忘れてつい行動に出てしまう愛らしいほどに哀れむべき男なのだ。ただ権力の絶頂にある(決心すればどんなことも可能である)ということでピエロにならないで済んでいるだけである。作者紫式部は、物語の主人公である源氏の類い稀な才能と容色をあげつらいながらも、ピエロとなるすれすれのところで救い上げている。源氏の性格の欠点が物語を楽しくさせることを十分に承知しているのである。

日本最悪のシナリオ 9つの死角』を読む

<< 作成日時 : 2013/04/02 01:16 >>

2013年3月30日



選び抜かれたテーマ

この本の発売をひょんなことで知り、図書館に頼らないで自分で注文して買った。現代日本が直面する危機について「起こってもおかしくない」想定の下でシナリオが描かれる。

私は現在、昔の日本を知ること全力を注いでおり、「武士道」といったテーマであちこちで講演などを行っている。しかし、現在を理解するためには過去を知らなければならぬと同じように、過去を知るためには現在を認識しなければならぬ。我ながらなかなか殊勝な心掛けといえよう。

本の帯にも書かれているが9つのテーマは「尖閣衝突」「国債暴落」「首都直下地震」「サイバーテロ」「パンデミック」「エネルギー危機」「北朝鮮崩壊」「核テロ」「人口衰弱」以上である。

これらの項目を一つ一つ検証するのは手間が掛かりすぎるから、私が目下喫緊の課題とする項目を二つばかりチェックしてみたい。

戦闘機の空中戦

まず「尖閣衝突」である。

海監といわれる中国の監視船はわがもの顔に尖閣領海内に侵入し続けている。既成事実化し「自国の領土である」と主張し続けることによって我が国が後退するタイミングを狙っている。少しでも我が国が手ぬるい対応をするとそこに付け込んでくるすきを狙っているのである。

埒が明かないとなると空からやってくるであろう。戦闘機の領空侵犯が起こるようになると、我が国でも戦闘機を飛ばさざるを得ない。一触即発の事態はそこから発生する。艦船からのレーザー照射どころの事態ではなくなるのである。

最も恐れるのは空中戦の発生であろう。私の知人の元F16戦闘機乗りは、相手が先に機銃やミサイルを発射するようなことがあるなら、必ず報復して相手の撃墜行動に出ることになっていると断言した。

戦争である。最も恐れなければならないのが空の戦いなのである。このままエスカレーとしていけばそうならざるをえない。

たとえどのような不幸な事故が発生しようと、中国と日本の全面戦争に突入することはあり得ないが、相当な犠牲は覚悟する必要がある。

巨大地震もサイバーテロもつねに想起しなければならない重要テーマであるが、

刃を突き付けられている尖閣問題は、国民の一瞬の気も抜けない外交問題なのである。

待機児童の根絶

そうしてもう一つ、(ほかのテーマは「もしも」というカッコ付であるが)必ず起こることが確実なのが「人口衰弱」である。「人口衰弱」は確実に起こりうることでありすでに起こっている。

今日本国が総力を挙げて取り組まなければならないのは、人口減による高齢化社会への対応である。統計によれば、2004年をピークに人口は減り続け、2050年には明治維新の時とほぼ同じの3700万人ほどにまで減少する。ただ減少するだけではない。65歳以上の老人が約半数を占めることになるのである。日本国滅亡は目前に迫っている。

民主党政権の時代には、中学生以下の子供を抱える全家庭に補助金を出す、ばらまき政策を実施して不興を買った。一千億円に達するそのお金で、子供を抱える家庭の主婦が安心して働けるように、安い費用で保育園を充実させ待機児童をゼロにして、子供を預けられないで悩む家庭を無くすることをなぜ考えなかったのであろう。

20歳代で男女が結婚することを奨励する大々的なPRも必要である。

また、フランスの場合のように、結婚していなくても、生まれた子供を既婚者と同じように安心して託児所へ預けられる制度を確立させることも必要である。

自民党に政権が移ってもそうした対策は急務である。現状でさえ消費税を10パーセント上げた程度では焼け石に水といわれている。あと10年後には30パーセント以上に消費税が上がっていなければ、国の借金が増えるばかりであり、老人

の医療費に税金の大半が遣われることになってしまう。確実にそうなることが分かっているわけであるから、対策を取ることは可能なのである。

60歳からの徴兵制

医療は格段に進歩し、数年後にはガンはほぼ根絶され、iPS 細胞による臓器再生で、これまで老人とされてきた65歳以上の人たちは、現代の50歳代の壮年と変わらない体力と気力に満ちているかもしれない。相対的に若者は減少しているわけであるから、「壮年」代の人たちが有力な働き手になっていてもおかしくない。

私の知人は、自衛隊(国防軍)の徴兵制を主張しており、対象は60歳以上の「壮年」を設定する。断らなければならないほど志願が殺到するはずだと知人は真顔でいう。妙な説得力があり感心して話を聞いてしまった。

このように考えると、老人パワーの増加を必ずしも悲観しないで済むかもしれない。

しかしながら、この本で指摘するような問題点を国民は真摯に受け止め、また政治家は真剣に取り組む必要がある。

最後に、本としての体裁に触れておきたい。構成は二部に分かれていて、一部が「最悪のシナリオ」、二部が「シナリオからの教訓」となっている。一部と二部は重なる部分が多く、また二部の記述は煩雑かつ専門的で読み辛い。いっそのこと、一部のシナリオの記述をより詳しくしてそれで全体の構成にした方が、興味が募りより分かりやすくなったと思う。

2013年4月13日



築さんとの出会い

先週の5日、小石川で妻が経緯営する店(略してTPC)で、シンガーソングライター築秋雄(ちくあきお)さんのライブが行われた。

築さんは、1月に下北沢のプロテスタント教会で行われた詩人たちの朗読会で、スペシャルゲストとして呼ばれていた。朗読を聴きに出向いた私は、始めて彼の存在を知ったのであるが、奄美大島出身というこの歌手の歌唱力と詩の素晴らしさに驚きを禁じなかった。

朗読会終了後、二次会が近くのインド料理店で行われ、30人を超える人たちが狭い店内に集い、会は大いに盛り上がった。

私が座った席の隣が空いていて、たまたま築さんがそこに座ったのを機に私から話しかけて名刺交換になった。そのとき彼の姓の由来を聞かされ、今まで知らなかった新しい事実を知った。

奄美では琉球と薩摩の過酷な支配を受け、姓は一文字しか許されなかったという。そういえば奄美出身の著名歌手元千歳(はじめちとせ)も姓は一文字である。

話をしているうちに、彼が誠実で実直な青年(すでに40歳を過ぎているとのことであったが、あえて青年と呼びたくなるほど若々しく精力に満ちていた)であることに好感を抱き、ぜひTPCのライブに出演して欲しいと思った次第である。

カウンターだけの小さな店であり、客も12人限定の極小ライブである旨を予め告げておいて、そのうち連絡するからよろしく頼む旨話をした。

抜群の歌唱力と掛け声

そうして、5日のライブ実現となったのである。彼はギターを弾きこなしフレームで固定されたハーモニカを吹く。高音域の声の持ち主であり、ときおり裏声に近い高い声を出す。しかも自ら歌の合間に掛け声を入れて、それが歌全体に高揚感を増幅させる効果を生む。掛け声は明らかに南方諸島人独特のニュアンスを持っており、他のシンガーソングライターたちとの差異化に成功している。

ライブは7時半に始まって30分ほどの第一部、客の飲食時間を挟んで第二部をさらに30分ほど歌った。その間島独特の太鼓(直径30センチほど)を客に叩かせ手拍子を求め、客の参加を促す心憎い演出を忘れない。



第二部終了と共に彼は私の詩即興朗唱を促した。築さんの巧みな演出と歌唱で
おおいに客席は盛り上がっており、それで終わってもよかったのであるが、先の朗
読会での築さんとの約定により即興朗唱を行うことになった。

朗唱の題を築さんに決めてもらうことにしてその旨を話すと、即座に「武蔵野」と
いう言葉が返ってきた。「武蔵野かぁ・・・」と私は心の中でつぶやく。

彼に先に音を出してもらうことにした。何とブルースだ。

私は小金井市に住んでいたころ、「武蔵野公園」の一角で剣術の稽古をしていた
ことを思い起こしていた。

詩即興朗唱のテーマは「武蔵野」

「武蔵野は私の精神の一部である。

秋枯れのその一角に私は剣を携え稽古を始める。

剣を振る回数ごとに私の身体は透明になっていき無の境地に近付く。

足元からそくそくと伝わってくるものがある。

武蔵野という台地が孕む霊気とでもいうべきか。

足下には私たちの祖先が層を成して埋まっている。

石器人、縄文人、弥生人、未知の種族の人たち、そうして幾億年も前から生息してきたあまたの植物動物たち。

その祖霊が足裏を伝わって背中を泡立たせ脳髄を突き上げてくる。

祖霊たちに包み込まれるようにして剣を振る私の木刀は速度を増す。

私自身であって私ではないものが全身を支配し異次元へ連れ去って行く。

木剣を下した私は原野にたたずみ 一息つくとき、

息が喉元を通過するとき、

私の脳髄の奥深いところで、喉の奥の言葉のプールで、発動を促された言葉たちがうごめくを感じるのだ。

言葉たちはどよめき押し合いへし合いしながら、喉元に込み上げてくる。

私は言葉を飲み込んで辛うじて狂気の発語を抑制する。

それらの言葉が「私の」ものではないことを自覚しつつ私は時をすばやく横断してゆく。

しかし喉元から言葉が発せられるのは一瞬のその時なのだ。

私はもう思考することはない。

喉仏が振るえ言葉は勝手に飛び出してゆく。

私の存在理由となって・・・」

成功裏に終わった公演

これらの言葉を発してからすでに一週間が過ぎ去った。

その場の感想や感動を何日も持ち越すのが私の良くない性癖ではあるが、矢継ぎ早に酒を飲んで(意図的に)酩酊した後に即興朗唱を試みるのが常であるのにも拘わらず、その内容についてはほとんどの場合、細部に至るまで記憶している。

一週間経った後でも記憶の容量に変わりはない。ただし、一字一句覚えているわけではない。再現に当たって、記憶を補い、文章間を整合させる加筆作業は致し方のないことである。

再現されたこの詩でも、明らかに断絶がある。武蔵野公園での剣術体験と、喉元に込み上げる発語の瞬間の間のつながりを欠いている。

私はあえて創作して補うことをしなかった。そこに即興の陥穽と意識の飛躍があることをはっきりさせるためである。

書き起こすと意味不明となっても、ライブの間では見事につながるのである。生きる現場というものは、意味不明の行動や言葉を見事につなげてしまうのだ。それが時の作用というものなのであろう。

築さんのブログによると、持ってきたCDは完売とのことであった。

当店で彼のライブは成功裏に終わった。またいつか彼を呼ぶことが出来る日を待ちたい。



鬼人(2本フルート)と希人(詩即興朗唱)の対決

<< 作成日時 : 2013/04/24 00:15 >>

2013 年 4 月 21 日



打楽器と化したフルート

昨日荻窪の『with 遊』で行われた鬼人との対決を終え、心から一息ついている。

鬼人の名は真野敏郎、現在フランス・リヨン市に住むフルート奏者である。

彼とは昨年店で私と「果し合い」を行ったが、時間の関係もあり私が即興朗唱を途中で降りたので、彼は不満を募らせており再度の対決となったのである。

その時の対決の様子はブログに記しておいたが、彼の打音フルート奏法は伴奏や共演などとは全くお構いなしで、競演を通り越して音による戦い闘演なのである。

彼は休むということを知らない。言葉に挑みかかるように絶え間なく打音を発し続ける。

彼の音にはメロディというものがないのだ。数本のフルートを使い分け、「ポポポポ、パパパパ、ブブブブ……」といった音を出し続ける。

あの華麗で優雅な音色を持ち味とするフルートが、原始音的な打楽器に変貌する。彼が創造したオリジナルの奏法なのだ。

二時間の詩即興朗唱

彼は今回の私との「対決」に際して、二時間休みなしという条件を出してきた。私の詩即興朗唱は長くても10分なので、二時間も即興でポエジを語り続けることは、限界をはるかに超える苦行に等しいものとなる。

彼の申し出を断ることもできたのであるが、挑戦を受けて辞退することは武士(もののふ)を自覚する人間のすることではない。

何が何でもやり遂げなくてはならない。受諾したその時から、私はその方法をいろいろ考え悩み抜いた。

例えば言葉ではなく肉声による音だけで対抗する、あるいは知識を総動員して宇宙誕生の物語を想像を交えて語る、また人類の歴史を海中に漂う有機物の頃から話を進める、といったことに思いを馳せてみた。

しかし、肉声の音だけでの対応は(そういう人物が現に存在するということだけではなく)新鮮味と面白さに欠ける。

宇宙誕生、人類の歴史は長々と語り継ぐことは出来るが、物語となってしまう「詩即興朗唱はポエジでなければならない」という私の元来の主張に反することになりかねない。

詩は驚愕でなければならない

アンドレ・ブルトンが「詩は驚愕でなければならない」と言った。これが私の詩の

原点である以上、詩即興は物語でも説教でも論説でもあってはならない。あくまでも詩でなければならないのだ。

夢は驚愕をもたらす。ブルトンが唱えたシュルレアリスムが、夢を詩と同列に置いたのはそのためである。

もちろん私は憶えている夢の体験を次から次に語り出す積りは毛頭なかった。例え驚きに満ちた夢の内容であってもそれは即興ではないからである。

だからといって、覚醒した脳髄で夢を見ることはできない。

色々悩み考え対決の前夜風呂に入りながら、「意識と言葉を巡る夢に似た旅」というアイデアが浮かんだ。

意識を自由に浮遊させ、浮かんできたイメージを言葉で気ままに補足してゆくというやり方である。

それだと物語に陥ることもなく説教になることもない。ただし、前後は支離滅裂となり全体の整合性は保ち難い。それでもいい。支離滅裂となってもどこかにポエィの香気が漂えばそれでいい、と自らに納得させ当日を迎えた。

ビールを飲みながら

何十人かにこの催しをメールやチラシで報せたが、「聴きにくる」と言ってきた人は三人ほどに過ぎない。開始は16時からであるが、余裕を見て一時間前に会場へ着くようにした。荻窪駅には私が住む最寄りの駅からバスで15分もあれば着く。

会場にはすでに真野さんが入っていてラーメンを食べに出かけたとのことであった。私は店の喫茶部でビールとサンドイッチを注文し、ビールをゆっくり飲みながら出だしの言葉を考える。

そのうち真野さんが帰ってきて「おー、もうやっているの！」と声を発した。

彼とは話をしない方が良い。私はゆっくりと食事を終えコーヒーを飲みながら、ひたすらに切り出しの言葉を考え続けた。

時間になって私の側からは4人、彼の側から3人の客がそろったところで16時定刻バトル開始。

私があいさつを兼ねてこの対決が成立する経緯を述べている間にすでに鬼人のフルート打音が開始されている。



文明は滅びる運命にある

「人類は進化してきたという。本当に進化したのであろうか？」

これが私の第一声である。

「進化したのではなくて退化しているのではないか？」

様々な道具を生み出して生活は便利になった。

便利になった反面その反動としての障害が負けず劣らず引き起こされている。

その最たるものが核兵器の発明・製造である。

そのことによって最早現代文明は頂点に達した。

あとは衰亡でしかなく、最悪の場合は人類の滅亡である。

文明というものは滅びる運命にある。

現代文明が滅びた後にまた新しい文明が勃興するとは限らない。これまでの文明は勃興衰退滅亡の繰り返しであった。

しかし、人類が滅びてしまえば新しい文明の勃興はない。

文明を造り上げたのは武器でもなく、生活習慣の向上でもない。言葉だ。

永遠の謎

言葉が人間同士を結び付け、文明を築き上げてきたのである。

しかし、言葉は意識を高めるとともに、否定し、切断し、敵意を高める。

そうして一つの文明が滅びる。

言葉は人類のかけがえのない財産であると同時に、人類の悪でもある。

人を生き返させるのが言葉であると同時に人を死や絶望に導くのも言葉である。

言葉は感情に迎合するが、一瞬のうちに感情を意志を思考を一変させる。

フランスの詩人ロートレアモンはその著『マルドロールの歌』でいみじくも言っている。

「前夜火のように愛し合った男女がその翌日たった一言の誤解のために、一人は東一人は西に袂を分かち、二度と相まみえることはないのは何故か、誰にも答えることが出来ない永遠の謎である」と。



古代賢者の叡智を超えられない

人間の意識の内容は2500年前の賢者たちが語り残した叡智を一步も出ていない。

文明は著しく生活を豊かにしてくれるが、

無知の知を説いたソクラテス、

人生の無常を喝破した仏陀、

道徳の基本を述べた孔子、

隠者の孤高を詠い、無用の用を説いた老子と荘子、

これらの古代の賢者を超える思想はまだ現れていない。

いくら道具が発達しても情動や感情は古代と同じなのである。

それどころか、素朴な感情は退化してきているといえる。

言葉は精緻になったかもしれないが、感情が言葉に追いつかず荒廃が進んでい

る。」

これらの言葉が発せられる間、数秒の沈黙が音にも言葉にもある。

脳髓が痺れて言葉が停滞し、指と唇が痺れて音が止まる。そうしてまた、音と言葉がうねるように交互に発せられる。

脳髓の中の宇宙

「すべてが言葉で言い表されるわけではない。

むしろ、言葉でいい表されないことの方が多し真実を語っている。

言葉は時に真実を覆い隠すのだ。逆に沈黙が真実を炙り出す。

見上げた夜の天空に瞬く星との距離は何億、何百億、何千億光年とへだたっているが、想像力という意識は一瞬のうちに何億光年先のアンドロメダに達し、瞬時に返ってくる。

境と境の間の埋めようもない間隙は、たしかに存在するが、決して言葉で言い表すことは出来ない。

裸足で大地を踏みしめたときに足裏から背筋に向かって伝わってくるあのゾクゾクとする感覚、

神社の大鳥居を潜るとき頭上から圧迫してくる緊張感、

南国の海の水平線に落ちかかる太陽がもたらす緋の直線に打ちのめされた時の感情の波立ち、

を表現する言葉は存在しない。

人間の直径20センチの脳髓に生起する意志、感情、そして言葉はそれ自体一つの宇宙である。」



(省略)

フルートの打音は私にのしかかり圧迫し打ち倒そうとするが、私はひるまず言葉を発し続ける。

喉は健在であるが、緊張の連続で膝が硬直し足が引きつって立っていられなくなる。

私は最後の言葉を発する。

「私の脳髓の、意識の果てしない旅はいまここに終わった。」

戦いを終えた後の安堵感

横に椅子があるのであるが、硬直した膝は曲がろうとはしない。両手で片方ずつ折り曲げ椅子に腰かける。

音は奮起を促すがすでに脳髓から言葉が去ってしまっている。

時計を見ると、最初に言葉を発した時から一時間半が経過していた。

鬼人が指定した時間に30分足りないが、即興朗唱の間、私は一度も時計を覗いたことはなく、私が終わったと思った瞬間「二時間」が経過していたのだ。

私は先に終えたが決して降りたわけではない。修羅場を終えた私の安堵感がそれを告げている。

鬼人は余韻を残して静かに音を終えた。

目をつぶって朗唱していたので、彼の二本フルートの演奏場面を見ることが出来なかった。

終了後、彼はそれをやって見せてくれたので二本フルート奏法を納得。客は少なかったが、記念碑的な闘演であった(ビデオ収録)。



2013年5月1日



掌中の珠

第二十五帖「螢(ほたる)」の巻。この巻も玉鬘(たまかずら)に関する物語である。

前回で述べたことであるが、玉鬘は、源氏の死別した愛人夕顔(源氏と出会う前にお世話になっていたかつての頭の中將との間にできた)忘れ形見である。

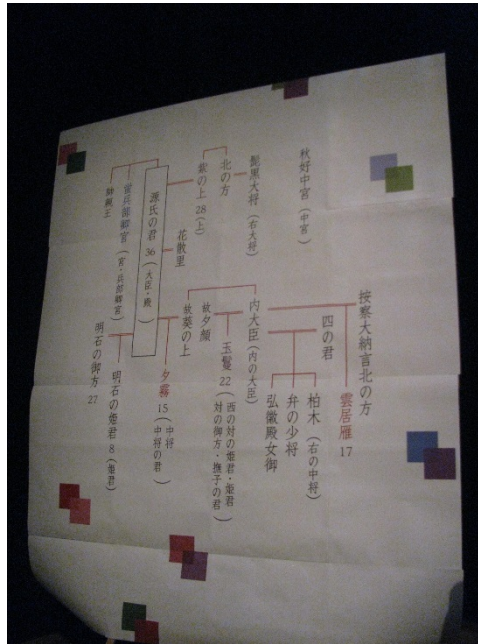
九州の大宰府から逃げるようにして京へやって来たところを源氏が発見することとなり、自分の娘という名目で六条院の館へ引き取ることになった。

紫の上も真っ青というほどの大変な美人として設定されていて、源氏はできれば自分の愛人としてほしいほどの惚れこみようで、まめまめしく世話を焼く。

実の父の内大臣(かつての頭の中将)へはわざと知らせない。その可愛がりようは度を越していて、隙あらば手を出したいところをじっと我慢をしているといった感じなのである。

二十代の源氏なら前後の見境なく手を出していたところであるが、さすがに中年の「おじさん」に差し掛かった源氏は少しは分別ができてきたらしい。掌中の珠を転がすようにして慈しみ、位の高い貴人が言い寄ってきたり恋文を寄越したりするのをにやついて眺めている。





珍しい昆虫を見守る子供のような

わけでも熱心なのは源氏の実弟に当たる兵部卿の宮である。

宮からしきりに送られてくる恋文や歌を邪陰にしてはいけないとあるときは言い、あるときは、彼は多情な男だから気を付けるようにと言う。

玉鬘はどうしていいか分からずただ困惑するのみである。

また、内大臣の息子が懸想して恋文をしきりに寄越すのであるが、彼は玉鬘が実の姉であることを知らない。 そうしたことを源氏はすべて知っていて、この愛しい姫が困惑し苦悩するのを密かに楽しんでいる。

まさに邪恋というべきである。普通ならそうした男に好い結末があるはずもないのであるが、なにせ官位のトップに位置する太政大臣なのであり、彼にとって善も悪も思いのままなのである。

しかし、邪恋とはいえ、邪悪な心を抱いているわけではない。むしろ珍しい昆虫を見守る子供のような無邪気な気持ちで玉鬘に接している。

蛍の光による類い稀な演出

ある日の夕暮れ兵部卿の宮が玉鬘が住む西の対にやってきて、帷子(かたびら)を隔てて玉鬘と対話しようと色々と話しかける。源氏は二人に気付かれない様に近くに隠れている。

玉鬘は兵部卿の呼び掛けに答えるのが億劫で、御几帳の陰に横たわったままである。

源氏の君はたくさんの蛍を布袋に入れ、その光が外に漏れないようにさらに布で包んで隠し持っており、二人を隔てる帷子を挟んで、兵部卿の宮がしきりに姫に話しかける頃合いを見計らいさっと帷子を引上げ蛍を放つ。一瞬、闇を照らすほどの明るい光が姫君の類い稀な美顔を浮き上がらせる。

姫は驚いて扇で顔を隠そうとするが、兵部卿の宮は、姫のこの世の人とも思われない優艶な姿をかいま見ることになる。

悪戯心なのであるが、何とも罪なことをするものである。一瞬のその姿をかいま見た宮が、狂わんばかりに恋心を募らせるであろうことを十分に承知した上での演出なのである。だからといって、宮に姫を娶(めあわ)せる積りなど毛頭ない。

とはいえ、こうした場面を設定しうる紫式部の感性は並々ならぬものがある。もしかしたら、貴族の遊びとして、蛍の光を利用することがままあったことは十分に考えられるが、現代人の我々でも鮮やかにイメージできるこうした優艶な場面設定は、作者の豊かな感性を讃嘆するしかない。

紫式部の物語論

そうした場面の後に、しきりに物語を読む玉鬘や明石の君に、源氏が物語論を語って聴かせるシーンがある。「物語りというのは作者が勝手にでっち上げた虚構だ」と源氏はうそぶくが、

「だって面白いんだもん」と玉鬘が抗議すると、

「まあ、作者の心に生じた考えを正直に書いているようなところはある」と言って譲歩する。

作者紫式部の物語論でもあるのであるが、それほど立ち入った論の展開はない。

この時代の物語というのは現代の小説と考えて差し支えない。

「事実は小説より奇なり」という言葉があるが、どんなに幻想的、空想的、奇譚的であっても、小説のイメージは現実を超えることは出来ない。

事実(現実)は人間が想像する世界を遥かに超えており、現実の奇怪さにイメージはついに追いつくことは出来ない。

創作というのは、現実の持っている不思議さ、奇怪さを小説的虚構によって確認する作業といえる。

それゆえ『源氏物語』も、「作者がでっち上げた想像の物語である」とは言い切れず、すべてがどこかであったことであり、またあっておかしくないことであり、現実はもっと深い闇と混沌に包み込まれている。

ただ、作者の類い稀な感性と物語構築の想像力が読者に訴えかけてくるのである。この物語の作者は、そうした意味で途轍もない人間心理の洞察家であるといえる。

語りの最後、いつもより帖のページが少ないということで、源氏が螢を観几帳の

内へ放つ件を語り部は原文で朗読した。

いつもながら毅然としてよく響く声は、原文のふくよかさを伝えて余すところがなく、極上のワインを喉に通す時のような心地よさを感じた。

2013年5月19日

製造業者側の自己防衛

食品(特にスーパー、コンビニ弁当、惣菜)の添加物の多さについては何度も言及してきたが、容器に記されている原材料名を読むと、二度とコンビニ弁当を食べる気になれなくなる。

安いからと毎日のように口にしていると、身体がおかしくなることは必定であると思えてくるのである。いくら安全であると宣伝されても、ペーハー調整剤、増粘剤、漂白剤、着色料、腐敗防止用のグリシン、ソルビット、リン酸塩などの人口加工物がこぞって加えられているのを見ると、ぞっとせざるを得ないのである。

弁当、総菜の消費期限はほとんど翌日までであるから、何故保存料を加えなければならないのか疑問に思っていたが、つい最近、製造業者側の自己防衛の手段であることに気付いた。

消費者は身勝手の代表

もし消費期限通りに消費者が食べてくれれば、腐敗防止のための保存料などの添加は必要ないはずである。しかし、買った弁当をそのまま放置しておいて、二日後三日後に食べたりする消費者がいらないとも限らない。

腐敗防止剤が入っていない弁当であれば、真夏などには一日で腐敗が進み、期限を過ぎて食べれば食中毒に罹ることは十分に考えられる。

食べた方は(自分の責任を顧みないで)弁当を売った側に責任転嫁しようとする

る。場合によっては訴えたりする場合も考えられなくはない。

いくら表に「保存料無添加なので必ず消費期限内に食べるように」と大書していても、消費者というのは身勝手の代表のようなものであるから、そういう弁当を作る方が悪い、と言うに決まっている。

健康への影響を度外視する業者

そうした事態になることは面倒であるから、販売側はあらかじめ予防策を考えるのである。かくして、味や健康を度外視した食品添加物のオンパレードとなるのである。

販売側、消費者のどちらが悪いと断定することは出来ない。

しかし、食品の色がくすんで見栄えが悪いから売れない、と勝手に思い込んでいる製造業者がほとんどではないのか？

少々色が悪くても、着色料や漂白剤を使っていない食品の方が売れるのではないかと私などは思うのであるが、一方消費者の側からすると、一見作ったばかりのように見える色の鮮やかな食品を選ぼうとする傾向にあることは明らかである。

であるなら、業者は直接的には自分とは関係のない健康への悪影響を度外視して、いつまでも色鮮やかな弁当や総菜を売ろうとすることは自明である。

色鮮やかなものは怪しい

やはり、問題は買う側にあると私は思う。少々色が悪くてもまた長持ちしなくても、自然のままの食品が結局は美味しいし、健康を害することもないと考えるべきなのである。万事につけ、色鮮やかなものや、ぱっと輝いているものは、怪しいと

みななければならない。

保存料を使わない食品を、消費期限を超えて食べて食中毒になったとき、文句も訴えも無効であるとする条例や法律を整備するとよい。消費者の無自覚と無責任さを思い知ってもらう必要がある。

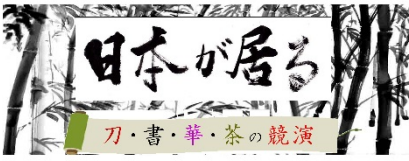
だからといって、業者の過度の添加物の使用はこれまた許されるものではない。

日々の生活に関わるこうした問題は、あらゆる階層、局面で活発に議論されるべきである。大げさな言い方をすれば、人を幸福にすべき科学技術の発達が、逆に人類を害している顕著な一例でもあるのだから。

『日本が居る』公演詳細

<< 作成日時 : 2013/06/23 22:14 >>

2013年6月16日



■ 出演 ■

- 佐土原台介 (刀道・文武両道塾主宰 全日本刀道連盟師範 教士七段)
- 木下信也 (刀道・文武両道塾生 全日本刀道連盟三段)
- 高梨良二 (刀道・文武両道塾生 全日本刀道連盟三段)
- 後藤佑介 (刀道・文武両道塾生 全日本刀道連盟三段)
- 田村 隆 (刀道・文武両道塾生 全日本刀道連盟初段)
- 山後墨仙 (書フォーマー 奎星会同人会員)
- 湯雲露後進塾生 (剣道範士範士十段)
- 山内壽希 (茶道海防塾生)

日 時 平成二十五年六月八日(土)午後四時より

場 所 アキバ放送Bスタジオ
(サンイーグルビル 台東区台東1-7-1)

料 金 1,000円 高校生以下無料



日時 2013年6月8日

場所 アキバ放送Bスタジオ(台東区台東 1-7-1 サンイーグルビルB1F)

入場料 1,000円(高校生以下無料)

出演 佐土原台介(刀道・文武両道塾主宰 全日本刀道連盟師範 教士七段)

木下信也(文武両道塾生 全日本刀道連盟三段)

高梨良二(文武両道塾生 全日本刀道連盟三段)

後藤佑介(文武両道塾生 全日本刀道連盟三段)

田村 隆(文武両道塾生 全日本刀道連盟初段)

山後墨仙(書フォーマー 奎星会同人会員)

渡邊華靖(かせい 創美流華道第十五世家元)

山内瀨舟(こうしゅう 茶道脩静庵師範)

写真撮影 佐伯領二

ビデオ撮影・編集 鶴見泰久

主催 刀道・文武両道塾

後援 みんなTV・アキバ放送

ジパング文化普及会

出合いの妙

元々この公演は、塾生中堅が三段に合格したことをきっかけに発表会の積りで企画したものである。

しかしながら、友人知己塾生たちと話し合ううち、せっかくの企てだから日頃交流がある他の伝統文化継承の方々と共演するのも面白いかもしれないということになり、**刀・書・華・茶**が一堂に集うことになった。

特に華道の方では家元が直々に来て下さるとは思いもよらないことであった。

四者がそろっての事前のリハーサルは行わず、当日始めて四者が顔を合わせるという急場しのぎであったが、私が事前に作成したタイムテーブル通りに本番が行い、見事成功を収めることが出来た。

構成は四部に分かれる。

第一部 刀道・文武両道塾型演武。

第二部 生け花と書フォーマンズの競演。休憩をはさんで、

第三部 刀道・文武両道塾試斬演武。

第四部 茶道お点前実演。



抜打ちと居合の違いは何か

第一部の型演武は、刀道連盟で定められた座り居合及び立ち居合各九本、文武両道塾で定めた抜打ち五本、その後木刀に替えての刀道連盟初伝組太刀十本、

中伝組太刀八本、両道塾が独自に開発した相対組太刀を披露。

私は抜き打ちという言葉に拘り、居合との違いを説明した。「抜き打ち」は居合とほぼ同義語であるが、居合との違いは、抜刀納刀を出来るだけ速くするというのが「抜き打ち」であると私は定義付けておいた（我が塾生の技量では居合と抜き打ちの区別はまだつかない）。

刀道という古武道は、平成元年に結成された最も新しい剣術流派で、主席師範は、NHKの大河ドラマで40数年にわたって殺陣・武術指導を担当されている林邦史朗先生である。

刀道の制定型は幾つかあるが、まだ進化段階にあると言ってよく、次々と新しい型が加わってきている。

座り立ち各居合九本、中伝の組太刀の制定からまだ三年も経っていない。型だけではなく試斬も出来なければならないので、昇段審査は格段に厳しいものになってきている。

危険な実戦組太刀

それらをすべてマスターした上で、さらに我が相対（あいたい）組太刀が加わる。

相対組太刀というのは、実戦を想定して刀を打ち合わせるもので、決められた順序があるとはいえ、間髪を入れず激しく打ち合うので、少し手順を間違えれば木刀が脳天や小手を叩いてしまうというかなり危険な組太刀なのである。

数えきれないほどに稽古してやっと、相手の脳天を砕くべく本気で打ち合っているように見える。

ステージが奥行三メートル幅四メートルほどしかなく、また天井の照明架が低く、刀を上段に延びきらせると照明架のバーに当たってしまうといった条件での演武で

あるので、演武側のプレッシャーは相当に強いものがある。

二名ずつ並んで同時に同じ型を演ずるので、水平抜き打ちの場合などは、一方の刀が相手の胴すれすれのところを通過するわけであり、一瞬の気の緩みも許されない。些少の間違ひはあったものの第一部クリア。



目くるめく美と調和

第二部は生け花と書である。

生け花は、一メートルを優に超える大花瓶に、枯木と花を活ける家元とお弟子さんによるパフォーマンスである。その奥で、書フォーマー山後墨仙氏が、緑色の顔料を金網に塗り付け、それを吹いて白紙に吹きかけている。

奥の壁に立てかけられたベニヤ板にそれぞれ白紙が張られ、また床にも畳二畳分の白紙が置かれて、それらすべてに緑の顔料が吹き付けられ、模様を作っていく。

そうして、天井の照明架にまで先端が届くような巨大な生け花が完成まじかを迎えようとする頃、背後の紙に、紫緑黒の顔料を使い分けて、巨大な筆で字が描かれる。左から順に 和・敬・静・寂 と読める。床の紙には 動 と書かれる。

完成した華麗にして迫力のある生け花と、ダイナミックな書パフォーマンスが融合した瞬間は、目眩むほどの美と調和が現出していた。





真剣を用いての相対試斬

第三部は試斬である。

そのための巻き藁を日野の本部道場で用意し本日に備え、午前中に会場へ運び込んでおいたのである。午後からのリハーサルでは本番通りに斬り、手応えを確かめておいた。

冒頭は、座り立ち居合を各八本ずつ。続いて相対試斬。

これは、お互いに斬り合いを演じる二名一組で、試斬台に立てた藁を間に挟んで真剣で斬り合いをするというものである。真剣で本当に斬り合いをすればどちらかが斬られて死んでしまうから、藁を相手に見立てて斬り合うのである。

向き合って交互に斬っても藁が間にあるので、どちらかの切っ先が相手に触れ合うということはない。お互いに真剣を振りかざして交差し合うのであるから、見ている方はドキドキハラハラものである。一二回どちらかの切っ先が照明架に触れることがあったが、照明が斬り落とされたり、刃こぼれがすることはなかった。

最後に私が二本の藁を立てて、二人の敵に対するように体転を用いながらスパスパと斬った。

抜刀道のように、目の前の藁をただスパスパと斬る(これを据え物斬りという)のではなく、立てた藁を動く敵とみなして体捌き(体転)を用いながら斬るのが刀道の実戦刀法たる所以である。

最後に出演者全員で刀礼をして締めくくった。心配していた怪我などの事故は全くなく無事終了。



お点前の客人にギャルたちも参加

第四部は、会場と並行して設けられた第二ステージで、お点前の実演。講師は山内 瀬舟(こうしゅう)先生。

会場のお客から客人を募り、実際にお茶を立てて供するのである。限定15名。

先生はマイクを使って御菓子の食しかた、茶碗の扱い方などを指導しながら、的確に茶を供してゆく。

女性でお茶をやる人は結構いるが、100人の人がいても一人か二人であろう。客を志願した若いギャルたちも、緊張しながらも供されたお茶を教わった通りの作法でいただいている様子であった。

一度でも作法通りにお茶を喫する機会を持てば、そういう場が巡ってきた時に慌てないで済む。

予定していた通りの一時間半で伝工程終了。後片付けをして打ち上げ会へ。

隣りが中華料理屋なので希望者は迷うことなく会場へ直行。出演者スタッフを入れて30名近い人が集った。

終了した後酒を飲みながらの喧々諤々の議論がこれまた楽しいものである。事故もなくたいしたミスもなく無事終了したことが、主催者側である私にとって最大の馳走なのである。

このイベントの全記録は、近々にユーチューブの動画で公開します。





真剣を用いての相対試斬

第三部は試斬である。

そのための巻き藁を日野の本部道場で用意し本日に備え、午前中に会場へ運び込んでおいたのである。午後からのリハーサルでは本番通りに斬り、手応えを確かめておいた。

冒頭は、座り立ち居合を各八本ずつ。続いて相対試斬。

これは、お互いに斬り合いを演じる二名一組で、試斬台に立てた藁を間に挟んで真剣で斬り合いをするというものである。真剣で本当に斬り合いをすればどちらかが斬られて死んでしまうから、藁を相手に見立てて斬り合うのである。

向き合って交互に斬っても藁が間にあるので、どちらかの切っ先が相手に触れ合うということはない。お互いに真剣を振りかざして交差し合うのであるから、見ている方はドキドキハラハラものである。一二回どちらかの切っ先が照明架に触れることがあったが、照明が斬り落とされたり、刃こぼれがすることはなかった。

最後に私が二本の藁を立てて、二人の敵に対するように体転を用いながらスパスパと斬った。

抜刀道のように、目の前の藁をただスパスパと斬る(これを据え物斬りという)のではなく、立てた藁を動く敵とみなして体捌き(体転)を用いながら斬るのが刀道の実戦

刀法たる所以である。

最後に出演者全員で刀礼をして締めくくった。心配していた怪我などの事故は全くな
く無事終了。く

